

# 中流住宅の平面構成に関する研究

## 第5報 南入り系列の玄関のつき方と発展過程

正会員 岡 俊江 同 青木正夫\* 同 竹下輝和 自 磯貝道義 同 中園真人

同 友澤貴知 同 宮崎信行 同 大津博幸 同 深野木信

### ① はじめに

南入り系列の玄関のつき方では、「続き間」の機能構成をそのまま保全し、土間側からアクセスする型と、これとは全く対立した、「続き間」の座敷と次の間との間に割り込んでアクセスし、そもそも「続き間」としての機能構成を破壊させる型がある。本報では、この2つの型に注目し、両者の違いが、その後の平面構成における史的な発展に及ぼす影響を考察する。

### ② 玄関のつき方と座敷へのアクセス

1) 玄関のつき方が①(土間入り型)の場合には、図-1に示すようないくつかのパターンがある。玄関は基本型の土間の外部につき出た形から、次第に、土間の内部にとりこまれ、あるいは土間にくいこんで、A空間側に接続し、玄関の形状配置も整形化していったと考えられる。図-1は、玄関のつき方の模索段階とみる事ができる。

玄関から座敷へのアクセスは、玄関→A→Dで従前のアクセスが踏襲されている。

2) ②(次の間入り型)は、A空間に式台を設けた武家住宅、上層農家住宅にその祖形をみることが出来る。玄関はA空間南側につき出た形から、①と同様に次第に内部にとりこまれていったと考えられ、多様なバリエーションがみられる(図-2)。

接客についてみると、玄関→A→Dのアクセスは守られながらも、A空間に玄関がとりついた形となり、続き間としての室機能に、ある程度の不安定さを与える結果となっている。

②は、いかにしても、A空間の機能が不安定となり、

続き間としての明確な構成を失なうことから、以後の発展に難があり、①あるいは③(割り込み型)の玄関のつき方の過渡期の型と考えられる。

3) ③(割り込み型)は、玄関が、座敷と次の間に割りこみ、た型で、接客空間としてあり、従前のD-Aの続き間構成が全くくみれており、内部の機能構成に大きな影響を与えるものである。しかし、その源流は古く、予想外に一種の原理をもった平面型として存在していたことが窺われる。現在のところ、江戸後期の隠宅に、その原形を見ることが出来る(図-9 禅僧仙涯和尚隠宅虎白院 福岡市1812年31周辺<sup>福岡市の虎白と云</sup>)。

この割り込み型が、いかなる要因と契機とで発生したかは、今後の検討をまたねばならないが、その大きな要因として、以下の点が考えられる。

- ④ ②(次の間入り型)の試行錯誤の結果(図-6は③に近似した玄関のつき方であり、②が変容して生じたとも見ることが出来る)。
- ② 外的条件 — 敷地とくに間口の制約
- ③ デザイン — 意匠的価値の発想による玄関の中央性。
- ④ その他、内部機能の変質等。

### ③ ①と③の発展過程

- 1) ①の発展過程は図-7に示すような段階をふむ。
- ④ A空間の東(西)側の土間部分に玄関がつく。台所は、土間の北側に位置する。
- ② 便所がD空間の側からC空間の側へ移動する。便所への動線として、まわり縁あるいは北縁がつく。

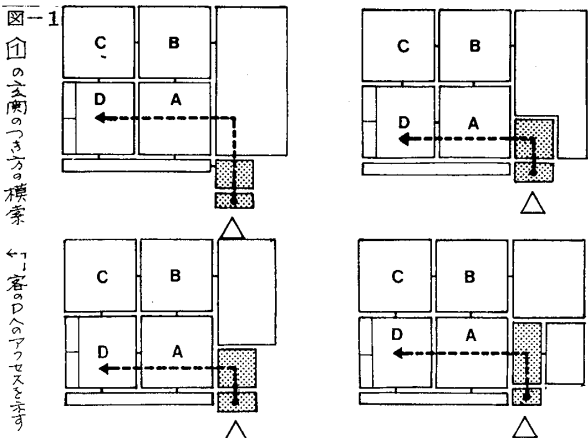


図-1 ①の玄関のつきの模索  
↑「客のDへのアクセス」

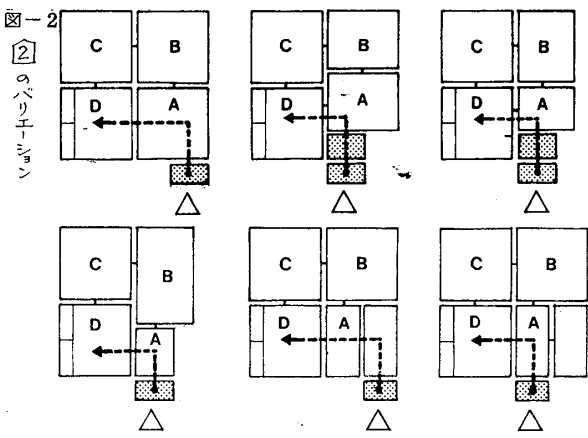
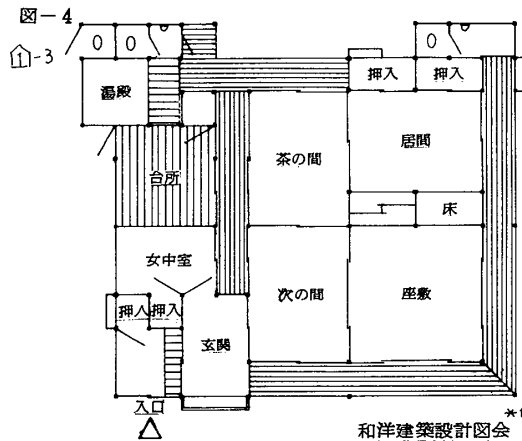
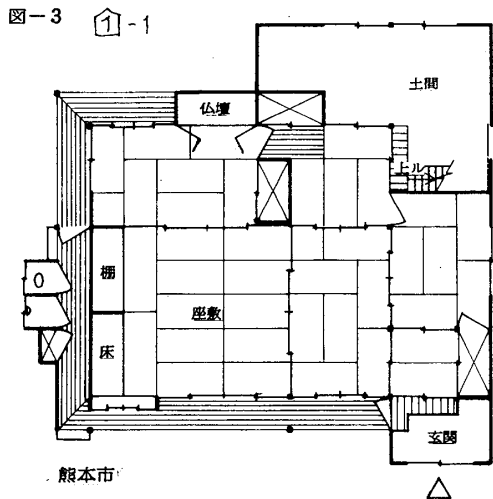


図-2 ②のバリエーション



和洋建築設計図会\*

便所の移動

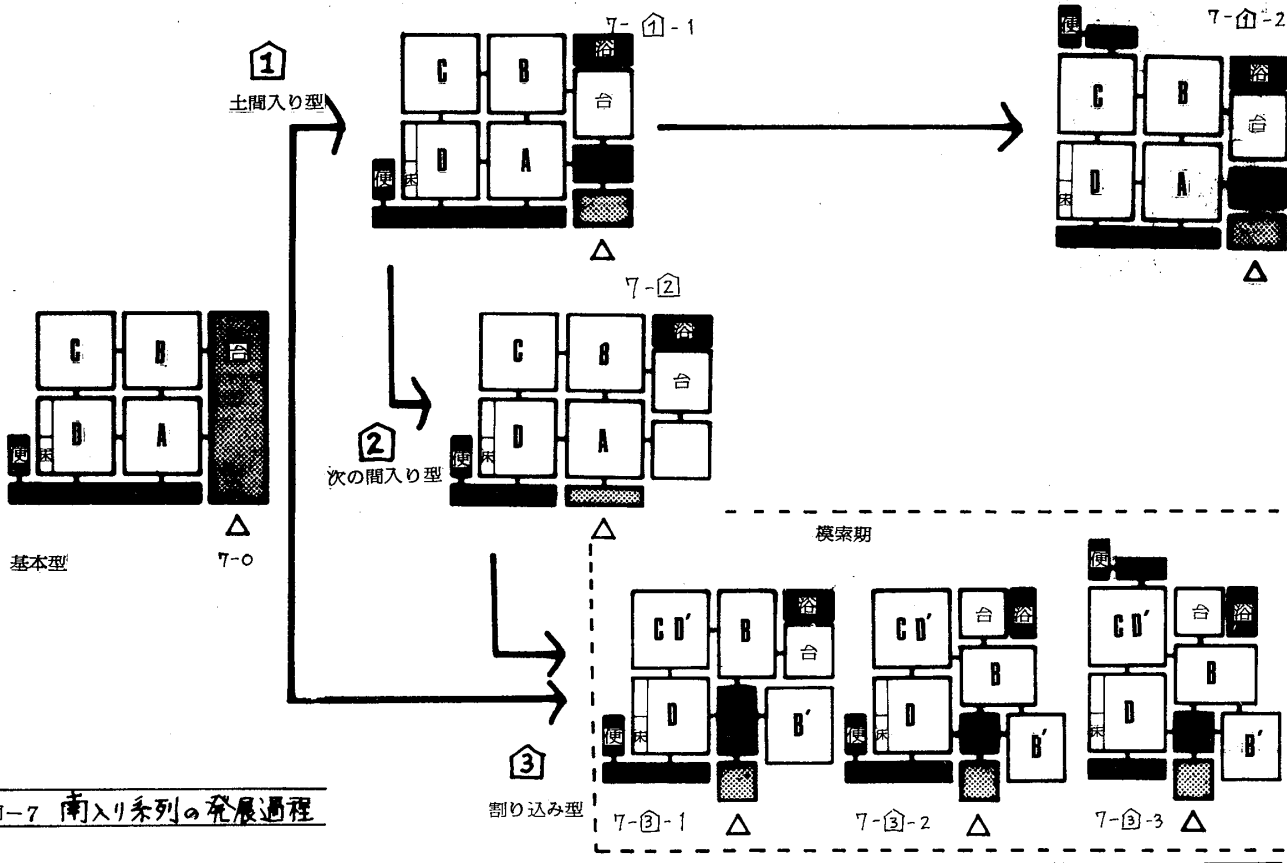
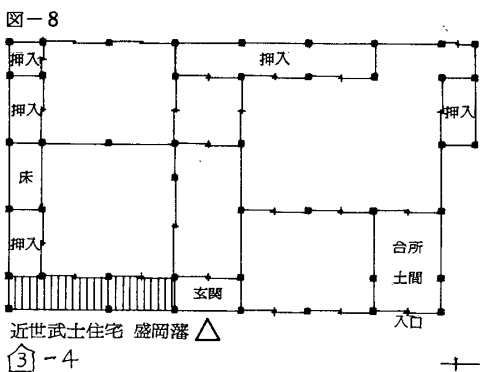
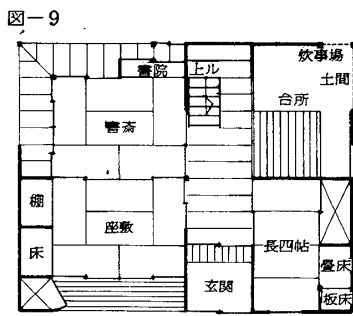


図-7 南入り系列の発展過程



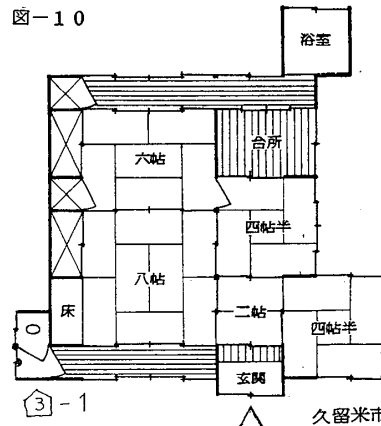
近世武士住宅 盛岡藩

③-4



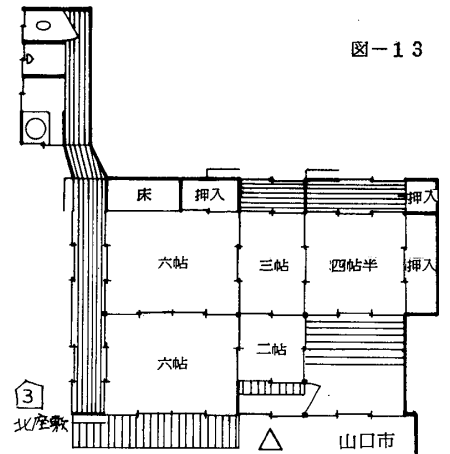
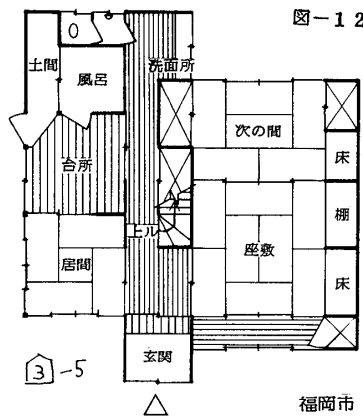
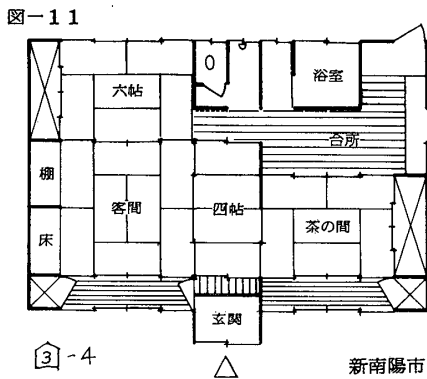
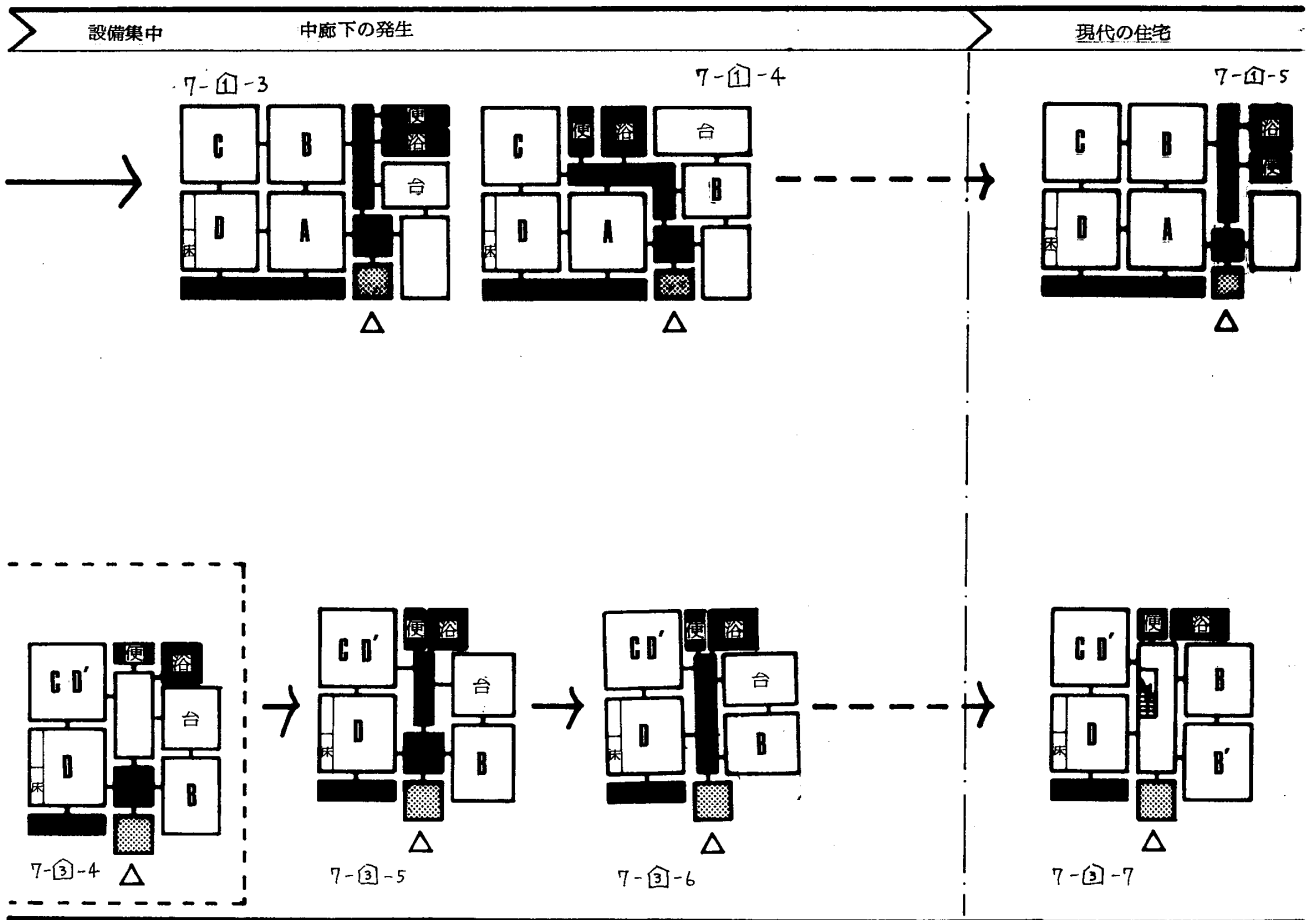
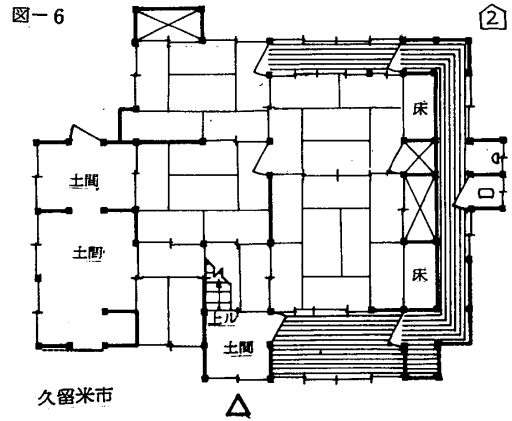
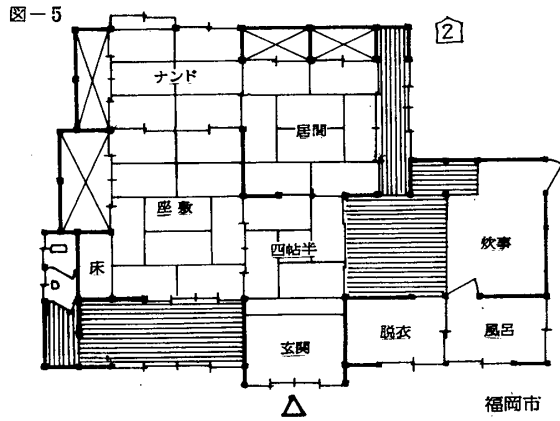
禅僧仙庵和尚隠宅 盛白院

③-5



③-1

久留米市



- ③ 土間部分の北側に、便所、浴室と台所の設備部分が集中し、居室部分との間にタテ中廊下が通る。
- ④ 玄関とタテ中廊下が通じる。
- ⑤ 設備部分が、北面中央に移動し、ヨコ中廊下が通る。

このプロセスは、北入り系列の第2段階の前半までに相当している。

更に、室数を拡大する場合、動線として中廊下を東西両方向に通うことで可能であり、又、2階にも居室を設けることが可能である。

接客空間は、従来のD-A続き間が、中廊下によって、より一層明確に、家族の領域とに区分される。Cの位置及びその機能はそのままで保全された形となる。

2) ③の発展過程は、いまだ仮定の段階であるが、図-7に示すように、

- ① 玄関の座敷と次の間の間に割って入る。
- ② 便所がC空間の側に移動し、まわり縁あるいは北縁がつく。
- ③ 便所と浴室が北面中央に集中して、タタミ廊下が通る。
- ④ タタミ廊下が板張りの廊下となり③のタテ中廊下型の形態が完成する。

しかし、前節でも述べたように、①~③の段階はすでに江戸時代において、祖形ともいえるべき平面構成が存在しており、このプロセスは、段階的發展ではなく、最終のタテ中廊下の発展は、飛躍があったと考えられる。

③の内部構成の変容をみると、玄関の座敷と次の間に入ったために切り離されたA室は、押入れを設けて寢室(C機能)あるいは茶の間(B機能)に転用された。一方、C空間にはA機能が附加されて、接客空間としてD-C続き間利用がなされた。

又、南北に中廊下が通ったことで、接客空間D-Cと家族の領域B、Aとが明確に区分された。

図-13の南入り玄関中央の北座敷型では、アクセスが玄関→A→Dで、接客空間はD-A続き間であり、①と同じである。③の格式重視の型といえる。

③が、仮定した発展過程を辿るならば、その発展過程、即ち

- ① 便所の移動
- ② 浴室、便所、台所の集中

③ 中廊下が通る  
段階は、基本的に①と同じであり、更に又、北入り系列と同じである。

3) ①と③の流いの現在の平面について述べる。

①と③は同じ南入り系列であり、とも、玄関のつぎ方が異なるために全くちがう、内部構成になっている。

①は接客空間としてD-A続き間を連続した型であり、このタイプは、現在の農家のヨコ中廊下型住宅に見られるが、これは、A空間が、日常生活空間から切り離されたであり、続き間としての格式性を昇格させた平面構成といえる。都市にもこの種の住宅が多く見られるが、この場合は、D空間とA空間とが入りかわり、玄関近くにD空間が位置している。その結果、A空間が、より日常空間としての機能を高めている。このタイプのアクセスは玄関→D直入り、接客空間D-Aで、①とはアクセスが変容している。

一方、③は、その続き間構成として、D-Cを続き間とする平面をなすもので、現代では、木-ル型の住宅に、構成の発展がある。

4) 接客時のサービス動線

接客時の、客へのサービスの動線は、①では、台所→A→Dで、基本型のサービスの格式性にかなっている。③は、台所→C→Dとなるが、C空間にはA機能が附加されているので、機能的には台所→A→Dとなり、③も又、サービスの格式性を備えているといえる。つまり、③は、玄関から座敷へのアクセスではよりD空間に近づけ、客へのサービスで格式性を保っている接客を意識した型である。

⑤ おまび

南入り系列では、玄関のつぎ方の相違によって、内部構成とくに接客空間の構成が全く異なる発展を遂げたが、いふまでも、接客を意識した平面構成であり、その流いが、現代の住宅にも続いていることは、中流住宅の平面計画上、留意すべき点である。

今後、更に、資料を収集して、仮説の検証を深めていきたい。

注1. 和洋建築設計図会 大正3年初版、大倉書店

注2. 住宅平面図の方位は表示していないものはすべて上が北である。本研究をまとめるにあたり、九州大学4年生 秋元一秀、仲江肇両君の協力をあつたことに記して感謝の意を表します。 201221

\*1九州大学教授・工博 \*2同講師 \*3同助手 \*4同大学院生 \*5同学生